

第1回登別市総合計画第3期基本計画市民検討委員会育み部会議事録

- ◆開催日時 平成26年5月27日（火） 10:00～11:00
- ◆開催場所 第2委員会室
- ◆出席部会員 部会長 安宅 錦也
部会員 仲川 弘誓
合田 美津子
佐藤 文子
磯田 大治
佐藤 史彦（庁内検討委員会 部会長）
【教育部次長】
千葉 浩樹（庁内検討委員会 副部会長）
【教育部社会教育G総括主幹】
- ◆欠席部会員 副部会長 川村 正勝
- ◆事務局 上野総務部企画調整G企画主幹
- ◆議題 「第5章 豊かな個性と人間性を育むまち」について

〈事務局〉

本日は初回の市民検討委員会となりますので、まず、事務局から今後の会議の進め方についてご説明いたします。まず、本日を含めて当初の2～3回は、皆さんの教育行政全般に対する思いや意見などをフリートーク形式で議論していただくと考えています。その中で今後体系図を検討していくに当たってのヒントやキーワードなどをひとつでもふたつでも見つけられたらと考えております。体系図の検討はこれを経て行っていただくことになってはいますが、この手順は各部会共通の進め方ですのでよろしく願いいたします。

体系図については、すでに庁内でも職員による検討委員会が組織されており、同じ内容を市民検討委員会と並行して検討する作業に入っております。

これまでの行政案追認型ではなく、新しい形として十分に議論、検討していただき、最終的には皆さんのご意見やお考え等をまとめた提言書としてお示ししていただくこととなりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

〈部会長〉

事務局から話がありましたように、これから何回か集まっていただいて、育み部会としての基本計画策定に向けて進めていきたいと考えております。

第1回目の部会につきましては今話がありましたように、教育行政に関わって、第

5章の育み部会がこれから策定していかなければならない内容について、それぞれのお立場から、ご意見やお考え等を出していただき、それを基本計画の策定に向けて生かしていくという作業をまず始めて参りたいと思います。

どこからでも結構ですので、それぞれ、まず教育行政に関わってお話をいただければと思います。

〈事務局〉

ではまず、部会長の隣りの方から順にご意見をいただいでよろしいでしょうか。

〈部会員〉

登別は国際観光都市でもあり、温泉には外国人の方も働いていますし、また、明日（あけび）という唯一の道立の中等教育学校もでき、英語教育にも力を入れているということでユネスコスクールにも指定されておりますし、国際観光都市という中で国際人を創るという意味では、情報の分野でも日本工学院があります。

あと、英語に限らず語学力を養えるような環境づくりにも力を入れていけるよう、どういう形かは分かりませんが明記できればいいのではないのでしょうか。

〈部会員〉

私の活動している範囲で感じることをお話しますと、まず、子供の体力の向上やその延長線上で、怪我をしないとか病気にならないとか、そういう子供たちを育てていくということも大切ですが、子供は育てるのではなく、育つものだと考えているので、育つための良い環境をなんとか整備していきたいという思いもあり活動しています。

生涯学習という括りの中で、子どもたちの育つ環境を作り、その中で元気に育ってもらって、またこの地に帰ってきてもらい新たに子供たちを元気にしていく作業をしてもらう、といった好循環を作ることができればいいなと考えています。

そのことを体系図の中に少しでも盛り込むことができればと思っています。

〈部会員〉

私は、活動として図書館と女性の問題に取り組んできましたので、これまで、それをベースに行政と向き合ってきました。

今回は2次計画がベースになっていますが、それとの比較検証をベースに組み立てていくことが重要ではないかと考えています。

図書館については30年近い活動を通じてようやく改革されたという過去もあり、行政には幾ばくかの不信感を持っておりますので、次の計画を立ち上げる時に、どのような問題点があって、その課題解決案を施策としてどのように盛り込んでいくのかということ共有しながら進めていかないと、内容の薄い絵に描いた餅のような計画になってしまうのではないかと、という危惧を持っています。

それと、これまでの生涯教育・社会教育との関わりの中で思ったことは、昭和63

年の変革により、教育委員会制度の中のあり方が、行政が指導する市民という前提の下での施策により、自立した市民が育つ環境を行政が作っていくというのが、それ以降の教育行政の基本理念だと思いますが、それらが本当にそうになってきたのかということを検証して、次のステップにするとともに、当時とは教育行政も変わっており、社会環境も変わりつつあるときに、次の世代にどう繋げていけばいいのかという問題点も書かなければならないという責任も感じています。

まだ中身については、考えていませんが、私には図書館という基本があるので、議論の中で、生涯教育、子供の読書環境、学校の図書館、そういった問題を抱き合わせて提起していきたいと考えています。

〈事務局〉

委員の皆さんそれぞれの思いを述べていただきましたが、この中で、国際化への対応、子供たちが育つ環境づくり、図書館、生涯学習、子供たちの図書環境の整備などキーワードになりそうな言葉が挙げられましたが、これらについて少し掘り下げていきたいと思いますが、皆さんご意見等ありますか。

例えば、国際化を進めるにはどのような教育を進めればいいのかなど、具体的なご提案などがあればお聞かせいただきたいのですが、いかがでしょうか。

〈部会長〉

私の立場としては、やはり、学校教育の部分での確かな学力の育成というのが一番の柱になると考えています。

体系図にも出ています「子どもたちの生きる力を育む」というのが、今一番の課題になっていますので、それに基づいて、学力・人間性・体力・健康という視点から、現在学校教育が進められているわけでありますが、その中で、今、話があったように、健康や体力の育成の中には、おにスポなど地域の活動と一体化して子どもたちの体力・環境を含めて進めていかなければならないと感じています。

それと人間性の育成の中での図書館、感性を磨くといった部分での外部人材の活用ですとか、生涯学習の中での文化協会との関連ですとか、外部の人材の方々の協力が必要となってくるのかなと思います。

また、国際理解という部分については、これから登別が目指す国際観光都市といたしますか、観光を目玉とした都市づくりの中で、いかにして学校教育の中で国際化に対応できる子供たちを育てていくことができるかという部分と、先程いろいろと視点を出していただいて、中等学校あるいは工学院という国際化に向けた教育というものが、体系図の中に少しでも反映できればいいものになっていくのではないかと、話を聞いて感じていました。

まだまだ、ポイントとなる部分は具体的にいろいろ出てくるのではないかと思います。大きな枠、括りの中では皆さんがお話されていたとおりではあると思います。

〈部会員〉

民間力というものを上手く生かした、学校とうまく連携がとれた教育システムというものを考えたらいいと思います。せっかく様々な分野の人材がいるのですから、その人たちの協力が得られるような環境づくりが必要ではないでしょうか。

〈部会員〉

30年以上前の古い話で申し訳ありませんが、当時、自宅近くにあった小学校の図書館がほとんど機能していなくて閉鎖状態にあったので、図書ボランティアとして整備をお手伝いしたいという申し出をしたところ、断られたという記憶があり、当時は教育委員会の中でも学校制度の中でも、外部の人材の活用といったことに非常に閉鎖的で受け入れてもらえないという現実がありました。

そういうこともあり、学校の図書環境を整えるということが非常に難しかったんですね。無関心であり、かつ貧しかった。

子供の環境を悪くしている原因は大人にあるというのが私の運動の根幹にあります。少しでもいい環境を作ろうという外部の人間たちの力を削ぐようにしてきたこれまでの行政や学校現場というのがあったわけです。

今は変わってきたというのはわかりますが、それをもう少し積極的な活用、良い意味での活用に向けていくように、しっかりとした方向性をこの中に織り込めたらと考えています。過去の話を知ることも大切との考えから古い話ではありましたがお話ししました。

〈部会員〉

本が好きな子供たちを育てたらいいのではないですか。子供たちが本を求めて図書館に来るようになれば、自然に蔵書も充実するようになるわけですから。

〈部会員〉

鶏とたまご論じゃないですが、子供の頃、本を読まない人は大人になっても本を読まないですからね。今の子供は忙しいですから、幼少時から読書環境を整えておくことが重要になるわけです。

本を読むという行為は個別的問題でもありますし、長い時間がかかりますが、人格形成の中で大きな力を持つものだと思います。その時に学校の力が非常に大きなものになると思いますから学校図書館をしっかり運営して欲しいと思います。

〈事務局〉

学校図書館と市立図書館の連携についてはどのようにお考えですか。

〈部会員〉

以前よりは連携が図られてきていると思いますが、公共図書館だけで人材に余裕が

ないわけですから、学校図書館への国からの支援（交付税措置）が付きましてよね。これまで、ずっと要求してきましたが実現せず、財政的な面もあってやむを得ないと思っていました。

今、学校に司書を配置し、当番制で何校か掛け持ちで回っていますが、あれでは足りない。専任の学校司書を各学校に置くということが明記されていないと駄目だと思うし、それを実現したい。

全国でも司書配置を充実させたところが増えてきているし、そういうところでは実際に学力も上がってきています。子供の読書レベルが上がれば、親のレベルも地域の文化レベルも上がっていくと考えていますが、このまちはそのレベルが高いとはいえ、子供たちも可愛そうだと思っていますので、それを解消する方向を打ち出して、この中に盛り込んでいきたいと考えています。

子供たちがこのまちに住んでいて良かったなと思えるように、また、出て行ったとしても、ふるさと意識をしっかりと持ってもらえるような子供たちを作っていくという役割も視野に入れて、しっかりと考えていく必要があると思います。

〈部会員〉

私の子供が通っていた小学校では、児童が増えたことにより教室が足りなくなり、その結果、図書室が無くなって2階の多目的コーナーに移動してしまったということもありましたし、市の図書館にも以前に一度だけ行ったことがありましたが、あまりの貧弱さに驚いた記憶があります。

〈事務局〉

最近は行きましたか。

〈部会員〉

それ以来行っていません。行きたいという気持ちになりません。

〈部会員〉

そういう声をもっと増えて、こういう場で反映されるようになればいいと思います。今は選書も充実してきて変わってきているので、ぜひ行ってみてください。

税金に置き換えるとわかりやすい。一人が年間に何十冊も読めば、税金が還元されたことになるのですから利用しないともったいないと思います。

貸出数が増えることにより予算獲得の後押しになるだけでなく、良い本を揃えることにも繋がっていく好循環が生まれることとなります。そのことを市民も理解していくことが大切だと感じています。それと、職員の人員配置も充実が必要と考えています。

〈部会員〉

子供たちが本を好きになるということはとても重要なことで、登別は他の財政を削っても充実を図らなければならない時期にきていると感じています。それを少ない財政の中で充実させる必要がある。

登別には大学がないので専門書が非常に少ないのですが、大学に通っているお子さんはたくさんいる。実際、卒業後もその専門書を使うのは2割程度しかいないわけですから、使わなくなった本の寄贈を募ったりするといった市民への働きかけが必要だと思いますし、本の読み聞かせを啓発していくことも必要だと感じています。

例えば、学校の授業の中でも月に1～2度、本の魅力について語ってもらえるような外部の人間を入れていくことは、お金を掛けずにできることではないかと考えています。それがシステム化されるといいと思います。

〈市庁内部会副部長〉

図書館まつりなどのソフト展開で、普段は図書館に足を運ばない人を引き込もうという活動をいろいろ努力して実行していると思いますが、ハードはお金もかかるし、財政状況に左右されてしまう側面があります。

ソフト展開で、まだ本の魅力を知らない子供たちを引き込んでいくというのは、行政が苦手な分野でもあるので、この部分で民間力の活用を図ることは重要なことだと思います。

〈部会員〉

共働きの家庭が増えてきており、その世代のボランティアのお母さんの確保が大変なので、祖父母の力を活用しています。

現役世代は働き、リタイヤ世代がボランティア活動するというのは、北欧では非常にシステムチックに循環しているし、これを登別でも打ち出していくというのも、ひとつの方法ではないかと考えています。

〈部会員〉

ボランティア活動を支援する仕組みが必要で、きちんとその人たちに意識付けをすることにより活動の範囲も広がっていきます。

〈部会員〉

そこを市が支援してあげるとのことですね。

〈部会員〉

学校支援地域本部事業でも、退職した方に、地域ボランティアとして学校で子供たちに関わってもらおうという活動の募集を行っていますが、退職したばかりの方は、引き続き働き続けていることが多くなってきています。

実際に70歳以上の方が多くなって、その中でも頼みやすい人に頼んでしまうという傾向になっていることは否めないと思います。

世代間の考え方の違いなどもあり、ボランティアの育成にはまだ時間がかかると考えています。

〈部会員〉

社会的な仕組みとして創り上げていくことが重要ですね。

〈事務局〉

ボランティア活動に協力したいと思ってもどうすればいいのかわからないとか、組織化したいがどうすればいいのかなど、欲しい側と、関わり方がよく分からない人たちのリンケージをうまく図るにはどうすればいいでしょうか。

〈部会員〉

そこは簡単ではないと思います。

やはり世代間の考え方の違いもありますし、高齢世代の中にもあれをしたいこれをしてほしいといった自己実現を優先する人も多いですから。

ただ、その中で少しでも社会に貢献できる余地・余裕はないのか、といったことを私は提起していきたいと思いますが、それをお仕着せするのではなく、こういう社会モデルが北欧にありますよ、そして、このモデルに近づけていくにはどうしたらいいですか、ということ提起していくやり方がいいのではないかと考えています。

それを共通の土台として、地域を個別ではなく全体で支える仕組みを創っていく、こういう大きな括りがあると分かりやすいし、関わってみようかなという気になる人も増えてきて、いい循環が生まれてきますので、この仕組みは、いずれ日本も取り入れる必要があると思っていました。

〈市庁内部会副部長〉

第5章の2期計画を見ていると、地域と学校と家庭の連携という表記が、いろいろなところに出てきており、10年前からこの考えが入っています。

それが今、具体的にどうなっているかというと、学校支援地域本部とか通学合宿であるとか、こうした、地域の方も一緒にやっという事業が少しずつ動いてきています。

まだ、こういう事業があるのでお手伝いできませんか、と声掛けをしている段階なので、それがどんどん回ってきて自発的に参加者が増えてくる状態になるといいと思います。

この前、こいのぼりマラソンがありました。これは、実行委員会がいろいろやりまして、町内会や中学校のボランティアなど全部で150人程の人が携わったのですが、町内会の方については、こちら側からお願いして「こういう交通規制が必要なので」

といった話し合いの中で100人程の人が来てくれたのですが、学校関係者については、こちらからお願いもしていないのに手伝いを申し出てくれて、実際、人が来てくれました。

そのようになってくると、やり甲斐も出ますし、やはり違いますので、このあたりが醸成されてくるといいなと思っています。

〈部会員〉

もらった資料によると、20年後には60歳以上の人口が約4割になるとでています。その世代がメインになるわけですから、その人たちの協力が得られるような事業を考えなくてはならないと思います。

ボランティアというと、自分の持っているものを人に与えるようなイメージがあって、私はあまり好きな言葉ではありません。それに、そこからあまり積極的にならないし、あるものを与えるだけですから長続きもしません。

ボランティアという言葉ではなくて、これをする事によって自分の体力維持ができるとか、これをする事によって知識をもっと増やすことができる、というように、言い方を変えてみるというのも一つの方法ではないでしょうか。

客の求めるものが違うのだから、それを整理して提供できるような仕組みを創っていく必要がありますし、私は違う言葉を使った方がいいと思います。

人のためではなく、自分のためにするんだという意識、発想の転換が必要なんだと思います。そうしないと拡がっていかない気がします。

〈市庁内部会部会長〉

ボランティアというのは、自主的・自発的に社会に還元したい、というところから発生したのだと思いますが、今はそのボランティアという言葉を使って人を募集したり、仕事をしてもらったりしており、随分と変わってきているのではないのでしょうか。決してボランティアという言葉自体が悪いわけではないので、要するに、市民としての役割をしっかり認識してやっていただければ非常に助かります。

〈部会員〉

同じボランティアとして何かをしたとしても、自分達だけで小規模でしている方々と、もっと幅広く広範囲にやっている方々とは、今現在、行政は横並びで計るしかないのです。

例えば、NPO法人格を取ろうと面倒な資料を作って時間を掛けて出ていくのと、市民サークルの方々が同じ位置付けになってしまいます。

行政に対する貢献度を計るものとして、認証制度を作ろうという動きが全国的に出てきています。

例えば、NPOの組織体であっても、こことここは行政への貢献度が高いから行政から認証を与えようというようなことです。

〈部会員〉

それは、行政への貢献度ではなく、地域への貢献度が高いから行政が認証を与えるということではありませんか。

〈部会員〉

そういう動きがにわかに出てきているんですけれども、そうすると少しリスクもあつたりしまして、行政の委託会社みたいになってしまう可能性があり、自由度がなくなってしまうと思います。

今の現状をいいますと、市民活動センターでの減免団体割合というのは、55パーセントとなっており、文化スポーツ振興財団が受けている教育行政がらみの団体では、95パーセントと聞いています。

使用料を安くしたいからといって、横一直線で減免申請さえすれば通ってしまうという社会になってしまっているの、そこを施策に盛り込むのであれば差別化というか配慮は必要ではないかと思えます。

〈部会員〉

確かに、ボランティア団体の棲み分けをどうするかというのは難しい問題ですね。問題提起をして、そのことを市民どうしで話し合える共通の場が設けられたりすることが大事だと思います。

これは、市民どうしで解決していかなければならないことであって、行政の手を借りて解決していくまちに協働というのは、言葉だけで現実性の薄いものになっていることになります。

私は、問題があるというのは決してマイナスではないと思っていまして、問題を解決し、良い方向に行く可能性があるわけですから、問題を解決しようと考えている人たちが力をつける場所だと考えています。

それが広がっていくことが、真の市民力をつけることになると思っています。問題はどんどん出した方がいいと思います。

〈事務局〉

そろそろ時間となりましたので、次回6月の開催日を決めたいと思います。

〈部会長〉

では、2回目は6月2日（月）、3回目は6月30日（月）、いずれも17時30分から市民会館小会議室で行いますのでよろしくお願いいたします。

〈事務局〉

後日、開催案内と出欠表を郵送しますので、それぞれの期日について期限日までに必ず提出願います。次回も、フリートークとなりますのでよろしくお願いいたします。